Global Explorers to Cross Borders G.ecbo
広島大学大学院国際協力研究科　組織的な大学院教育推進プログラム

Newsletter

第5号　Vol.2No.2

グローバルインターンシップ推進拠点の形成（G.ecboプログラム）
—10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ—

発行日：2009年11月

目次:

冬期派遣選考	1
事後研究	2
課題発見セミナー	3
2009年度夏期派遣学生帰国レポート	4-8
OB/OG報告	9
活動予定	10

ディベート演習公開決勝戦の開催

2009年7月31日（金）14時35分より、広島大学大学会館1階大集会室にて、ディベート決勝戦を開催しました。
本講義は広い視野や柔軟な思考能力・コミュニケーション能力を身につけるため、マツダ財団と共同で行っております。最前線で活躍する社会人を招いて実践型の知識を習得し、演習（ディベート）を通して、各専門分野で学んだ知を社会に活かすために最低限必要となる考え方を学びます。
最終講義である今回は「日本は高速道路の休日上限1000円を拡張すべし 」というテーマでディベートが繰り広げられました。判定の結果 肯定4（うち会場票が1）、否定1で肯定側の勝利となりましたが、これまで培ってきた学生たちの能力が存分に発揮され、決勝戦にふさわしいディベートが展開されました。

院生が「高速道割引」討論

広島大 拡充か否か 熱く主張

広島大（東広島市）は31日、土日曜・祝日に上限千円となった高速道路通行料の割引制度を拡充すべきか否かをテーマに、学生ディベート大会を開いた。賛院選も争点の一つだけに熱のこもった討論となった。

大会本部が設定した拡充内容は、期間を現行の2年から5年間に延長▽エコカーは上限500円▽トラックやバスも対象に▽ETC車なら、大学生が個人的見解とは別で4人一組で5チームを結成、予選を経て3チームが同日の決勝に進んだ。

肯定側は「エコカーが増え、ハイスピード走行で燃費効率が上がるため、二酸化炭素（CO2）が大幅削減できる」と主張した。否定側は5月の大型連休を例に「通行台数が増えてCO2が増えたことや、フェリー業者が経営打撃を受けていることを指摘した。

新聞記事や各種統計も示し、相手側の立論の矛盾を突き合った。学生が審査し、肯定側が4―1で勝利した。

両チームは「政策への関心が高まった」と口をそろえた。民主党が政策公約（マニフェスト）に掲げる通行料無料化は論議しなかったが、学生からは「財源問題をじっくり聞いてみたい」との声もあった。

（下久保潤司）

高速道通行料の割引制度について討論する広島大院生

※翌日の中国新聞に掲載されました。

2009年度冬期派遣学生決定

今年度冬期派遣学生の募集を行い、2009年度冬期G.ecboプログラム派遣学生として11名の学生がインターンとして派遣推薦されることが決まりました。

【2009年度　冬期G.ecboプログラム派遣学生】

重川 瞳（日本） Banda Benson（ザンビア） Zhumanova Munavar（キルギス） Shrestha Suman Lal（ネパール） Chaudhary Tharu Buddhi Ram（ネパール） Syed Rashedul Hossen（バングラデシュ） 隅田 姿（日本） Abm Sertajur Rahman（バングラデシュ） Md. Helal Uddin（バングラデシュ） Li Xin Yan（中国） Hendri Hendri（インドネシア）

以上11名、所属はすべて国際協力研究科。

G.ecboプログラムとは？

インターンシップを中心に事前研修・事後研究を通して、
既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適応できる研究者の排出、国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と、世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指します。

事後研究

G.ecboプログラムでは、インターンシップ研修を柱として事前研修および事後研究からなるサンドウィッチ教育を行っております。今回はサンドウィッチ教育の事後研究である帰国報告会、また今年からスタートしました課題発見セミナーⅡの活動についてご紹介します。

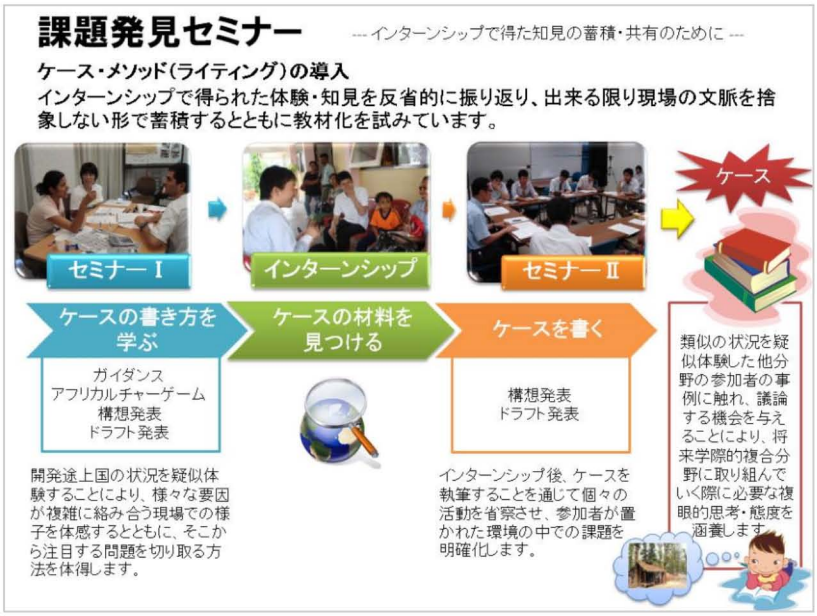
帰国報告会

インターンシップ終了後、報告書を提出するとともに、パワーポイントを用いた英語での帰国報告を義務付けています。インターンシップ中の生活のほか、研修および研究内容についての発表を英語で行います。また、発表後は、TAやRA指導教員を交えて質問および議論が行われます。
中には派遣前に想像していたものとは異なるインターンシップとなった学生もいますが、インターンシップを通じて得たものは、コミュニケーション技術であったり、英語力であったり、物事を遂行する力であったり様々です。特に全体を通して、顕著に向上したと思われる能力は、積極性ではないでしょうか。同じインターン生からの質問も活発に行われます。
英語力に関しては、伝えられないもどかしさを抱え帰国した後が一番伸びる時期でもあり、学生それぞれの努力を感じることができました。

平成21年度開設新規プログラム

課題発見セミナーⅡ

夏期インターンシップ終了後、課題発見セミナーⅡを開講しました。課題発見セミナーⅠでケースの書き方について学んだ学生たちは、そのノウハウを生かしつつ、インターンシップ先でケースの材料を見つけてきました。帰国後それらの材料を利用して、ケースを書きます。
ケースライティングセミナーにて、再度ケースについて学ぶとともに、ケースの企画案を提出、議論し、ケースを作成します。漠然と経験したかのようなインターンシップも、整理して書くことによりクリアになり、形として残ります。また、それらのケースを使い、後輩やインターンシップに行かなかった学生と、インターンシップ経験を共有し、そこで起こった問題について議論する機会を与えることができます。



スケジュール「課題発見セミナー(II)」

インターンシップ終了後1ヶ月以内にケース作成へ向けた構想・企画案の提出・発表・質疑。
構想発表後約1ヶ月後：ケース第1案＋授業案完成。
⇓　　RA、担当教員からのフィードバック。又は個別の内容指導。
第1案提出後約1ヶ月後：ケース最終版提出
教材の作成と蓄積を目指します。

ケースライティングセミナー

2009年11月5日（木）に国際協力研究科において，国際基督教大学教養学部教授（政治学・国際関係学）毛利勝彦先生を招き、ケースライティングセミナーを実施しました。参加者はインターンシップ学生20名教職員8名を含む28名です。セミナーは午前午後を通して、ほとんどが英語で行われました。

午前の部では、毛利先生より、アクティブ・ラーニングのひとつであるケースメソッド教授法についての講義と、ケース討論のデモンストレーションを行っていただきました。午後からは一人30分程度で、夏期海外インターンシップに行った学生たちによる、インターンシップ体験にもとづいたケース企画案の発表と検討を行いました。特に活発な議論が行われた場面で、毛利先生は学生たちの企画を図式化し、1つの問題に対して誰が（どの立場の人が）どんなふうに思っているのか、多方面から見て分析し、整理されながらアドバイスされました。“ケース”というものに馴染みが薄く、「ケースとは一体何か？」という思いで、ケースを書いてきた学生ですが、毛利先生の巧みな分析とアドバイスにより、“ケース”について明確になったようです。また参加した教職員にとっても、海外インターンシップでの個人的なフィールド体験を、国際協力学の教育研究における、「経験知/臨床の知」として共有するための道が開けたセミナーでした。

経験した事象の中から、どのような視点で課題を切り取り、そしてどのようにケースに落とし込んでいくのか。ケースライティングで肝となる部分に関し、示唆に富むお話を頂きました。インターンシップでの小さな気づきでも、視点を変えながら整理しなおしていくと、様々な議論のポイントが隠れていることに気づかされました。そのプロセスは、普段の生活においても、課題に対して取り組む際に必要な、課題を俯瞰する能力、またその解決策の作りだす能力につながるといえます。

貴重なインターンシップの経験を単に時系列的に振り返るのではなく、ケースの形にすることでより臨場感のある報告になるのではないでしょうか。作成されたケースをどう扱っていくのかを含め、今後G.ecbo独自の取り組みを検討することで、さらにケースに意味を持たせることができるように思います。（国際協力研究科・RA高松森一郎）

活動報告　2009年度7月-11月

7月13日14日	英語プレゼン最終発表
7月24日	壮行会
7月30日	随時海外および国内インターンシップ派遣
10月9日	G.ecbo Day開催　冬期派遣募集
10月21日	冬期海外インターンシップ応募締切
10月23日	冬期海外インターンシップ面接・選考
10月22日27日	2009年度夏期派遣学生帰国報告会
11月4日12日	2009年度夏期派遣学生帰国報告会
11月5日	ケースライティングセミナー
11月13日14日	課題発見セミナー　アフリカルチャーワークショップ開催
11月18日	冬期海外インターンシップガイダンス

壮行会の様子

2009年度夏期派遣学生　帰国レポート

NISHA KUMARI　インド出身
土屋　善之　YOSHIYUKI TSUCHIYA

派遣先	アルメック（ベトナム）
研修期間	2009年8月6日　～　2009年9月12日
研修内容	To examine the process of knowledge transfer ハノイにおける交通調査の実施方法・調査結果の利用方法について

Impression of Internship

The purpose of my internship was to examine the process of knowledge transfer from headquarter to the subsidiary office of Japanese multinational companies. Secondly I wanted to identify the role of expatriates in knowledge transfer and the factors affecting the knowledge transfer in Japanese MNC from the HQ to the subsidiaries office.

During this internship I proposed my host organization to let me work there as an employee if possible. Being a part of its working environment I thought I could better understand the work ethics and the routine of the organization, which I thought to compare later with other organizations. Ms. Iwamoto, my guide over there told me if she will find a job for me she will provide me. But after joining the company I couldn`t be able to do the 1st job provided to me. That job was to find data of accessibility indicators of various cities in India. I tried but unfortunately I couldn`t find any source to retrieve such data. But still I used to be there in the company from Monday to Saturday, 8:30am to 6:30pm. I tried to observe the work of employees, their behavior etc.

Just after joining the company I had a feeling that everything is going to be very difficult. One needs to be very patient and very clear about their plan. Many times I found difficulties to convince my supervisor there why I want to ask certain questions to the employees there. Every company has their own system. So we need to observe things minutely to understand the process as you can not disturb people all the time. I had to do it and felt regretted too.

This internship contributed in many ways to my career and study field. Especially this gave an important insight to my research methodology. And I learnt to design, develop and execute survey in a right way which I think will promote my research in right direction.

Advice to next internship student

ハノイはとてもにぎやかな都市で、中心市街地を歩いているとよく声をかけられます。反日感情などは持っていないように思えます。会社は正社員の割合は半分以下で、残りはプロジェクトを一緒にしている別の企業の方やJICAの方が出入りしていました。社員の方はオフィスの近くに住んでいて、徒歩やタクシー（会社の車）で通勤しています。私の場合アパート（エアコン、テレビ、インターネット、風呂トイレ共同、食事なし）を借り、家賃は210USD/monthでした。生活に支障はまったくありませんでした。オーナーはベトナム人でしたが英語が通じ、とても親切。屋台はどこにでもあり、100～200円くらいで食べられます。中心市街地では各国の料理（日本食も）が食べられます。チップは必要ありませんが、お金を払ったとき、お釣りがないと言って少額のお金は返ってこないことがあります。数10円のことなので我慢。

週1回程度ミーティングがあり、そこで進捗状況を説明します。忙しい方ばかりなので、この時間くらいしか相談できません。研究をする場合は、まずハノイとの関連がないと意味がないので、ハノイを知るという意味で、最初の1、2週間いろいろ見て回った方が良いでしょう。

2009年度夏期派遣学生　帰国レポート

尾崎　崇　TAKASHI OZAKI
谷本　修一　SHUICHI TANIMOTO

派遣先	JICAインドネシア・マカッサルフィールドオフィス
研修期間	2009年8月10日　～　2009年9月4日
研修内容	JICAが委託しているプロジェクトに参加

Impression of Internship

今回プロジェクトに配属になり、現場のプロジェクトの動向を肌で感じ、プロジェクトを進展させるのがいかに難しいかを目の当たりにしました。

まず、今回配属されたプロジェクトの評価が、非常に難しいという印象を受けました。このプロジェクトの最終目標は、東部インドネシア地域の工学教育と研究の拠点になることです。実現するために、東部インドネシアの大学拠点であるハサヌディン大学で、持続的な地域開発に寄与することのできる人材育成を目指しています。しかしながら、プロジェクトが実際達成できたかどうか、短期間において定期的に指標を図ることが難しいと感じました。それは、このプロジェクトが、現在走りながらどのようにマネージメントしていくかを決めている段階であるからです。また、適材適所にプロジェクトを動かしてはいますが、最終目標に果たして直接結びつく結果となるのか、さらに最終的な達成度をどのように評価するのか、定量的な評価方法が実在するのかについても疑問に感じました。

また、JICA短期専門家とハサヌディン大学側の会議を視察していてよく感じたことのひとつに、技術協力を実施する日本側と享受するインドネシア側での意見の対立がありました。日本側は、論理的に筋道の通った政策を実施して欲しいと要求しているのに対し、インドネシア側は、多くの理由づけをして決して自らの非を認めることはありませんでした。また最終のプロポーザルの提出期限となっても、多くのプロポーザルが未提出のまま閉め切られていた。考えられる理由としては、JICA専門家に厳しいコメントを貰い、LBE（Labo-Based Education）ファンドを得られる見込みがないと感じたため提出しなかった可能性があります。インドネシアでは上下関係が厳しいため、プロポーザルを競争してファンドを獲得する方法に困惑している若い教員もいたかもしれませんが、いずれにせよ、技術協力で協力を受ける国としては意欲が足りず、これからプロジェクトを進める上で障害になってくるでしょう。

また、アポイントメントは電話で行います。ハサヌディン大学では、ネットワークシステムが確立しておらず、電子メールが機能しません。そのため、個人の教授に会う際にも電話を利用して時間を設定します。一度決定した会議であっても、キャンセルされることも少なからず発生するので、迅速な連絡ができず待ちぼうけを食らうこともあります。効果的に物ごとを進めていくことが想像以上に大変であると思いました。

Advice to next internship student

宿泊施設は清潔で、日本のビジネスホテルのようなものと考えておけばよいでしょう。サービスは期待しない方がよいでしょう。

洗濯は毎日１人分無料であるが、それ以上は料金が必要。室内で洗って干すことをお勧めします。食事はバラエティに富んでおり、基本的に辛いです。なお、生水は飲まないように気をつけましょう。

ホテルを除き基本的に英語は話せないので、インドネシア語をある程度勉強しておいた方がよいでしょう。買い物も満足にできません。

実際に行ってみないと分からない点が多いですが、プロジェクトについてのプロポーザルなど、Webに公開されている情報があるので、事前によく読んでおきましょう。メールで質問することもできますが、多忙であるため失礼のないように。

2009年度夏期派遣学生　帰国レポート

野口　洋子　YOKO NOGUCHI

派遣先	株式会社パデコ （カンボジア）
研修期間	2009年4月21日　～　2009年6月18日
研修内容	JICA理数科教育プロジェクト（STEPSAM2）に関わる業務

Impression of Internship

JICAプロジェクトSTEPSAM2の業務に携わることで、幸いにも私は3種類の専門家の業務を見ることができました。教科の短期専門家、JICA長期専門家、そして、コンサルタント会社の専門家の3種類の専門家です。大学教授である理科教科の短期専門家には教科知識をNTに指導することが求められ、JICA長期専門家には現場レベルでの運営が求められ、そして、コンサルタント会社の専門家には資金面、人材面等プロジェクト全体の運営が求められていました。このように、各専門家に求められていることは異なっていること、そして、それに伴って業務が異なることが分かりました。私の業務ではありませんが、私のインターンシップを担当してくださった株式会社パデコの専門家の方は、このプロジェクト担当のJICAの方とプロジェクトの進捗状況についての会議をよくもち、情報の共有化を図りプロジェクトを円滑に進行させるための活動も行っていました。このJICA担当者の方との情報の共有もそうですが、専門家の方々はSub Technical Working Groupなどの会議において、カンボジア教育セクターで活動している他ドナーの方と情報交換を行ない、また、本プロジェクトのカウンターパートである教員養成局やカンボジア教育の最高機関である教育省に対しプロジェクト報告も行っていました。このように、1つのプロジェクトを進めていく段階には、様々な機関との連携があることを学びました。このことは、私がこのインターンシップの目的の1つとしていたものでもあります。今回のインターンシップで心に残った言葉があります。それは、株式会社パデコの専門家の方が言っていた言葉で、「僕たち専門家はそれ自体が商品である」という言葉です。専門家の方々は、常に自身を向上させるために努力を惜しまずにいること、そして、プロジェクトに対して、興味・関心、そして熱い情熱を持っていることを学びました。

Advice to next internship student

2ヶ月間だったので家を借りました。休日はカンボジア人のお友達の家に行ったり、地方に出かけました。食事は市場で食べたり、配属先の方と食べに行っていました。仕事以外の場面に限りますが、現地の人と楽しめるという点で現地語は会話程度できた方がいいと思います。ただ、生活するのには現地語は必要ありません。インターンシップ生という立場がありますが、自分の意見を言うなど、積極的に関わっていくことが大事だと思いました。

飯山　慶　KEI IIYAMA

派遣先	ICLEI South East Asia Secretariat（Philippines）
研修期間	2009年8月15日　～　2009年10月9日
研修内容	To look into the actual Solid Waste Management of 2cities. To Grasp the effect of the two ICLEI's program

Impression of Internship

Through my research, I studied SWM of course, and also political structure of the Philippines. I knew that the Philippines are fairly decentralized in terms of local budgeting, but therefore, local development highly depends on financial richness and idea of each mayor or captain. Then I felt that for starting and advancing new activities such as environmental policy at local level, it is necessary to deepen understanding efficient and effective management and stable framework. Unfortunately, this research on SWM will not directly connect my master thesis, but I got fairly interest in the budgeting system of the Philippines and might get a lead for future research in IDEC.

Apart from about the contents of research, I learned the way of the survey by rich experiences. I keenly realized my shortage of preparation for example making an itinerary, listing my needed data and information, and so on. And necessity of explaining my plan in brief and how to interview in English must be useful in the future. Although these all might be quite fundamental, these are what I cannot understand if I don't actually face. These experiences are most important in this internship and useful in not only future research in IDEC but also in my whole career.

2009年度夏期派遣学生　帰国レポート

Through this internship program, I really felt that I was supported by various people. In the survey, the hospitality and cooperation by officers and interviewees are highly beyond my expectation, and I was really impressed. I think that Filipinos give more aggressively their hands before being asked from others, comparing to Japanese. For example about appointments of interviews or questionnaires, they willingly offered cooperation. I really thank the great stance and I think I should copy that.

ICLEI staffs have same stance and they cooperated me very much. They arranged my survey in the local spots and advised many things. Though they are busy, they were always willing to answer my question. And moreover I could enjoy my life in the Philippine for example food, culture, holidays, and so on thanks to them. I owe the richness of the experience to them.

Advice to next internship student

はじめの3週間は準備に充てられました。ただ日本にいてできることはやっておくべきでした。スタッフは快く相談に乗ってくれますが、基本的に忙しそうなので極力詰めておいた方がよいでしょう。またどれほど準備しても調査不可能だったり、現地の状況が予想とは異なっていたりするので、柔軟な姿勢が必要です。

実際の調査は、市や県の職員に協力するしてもらうことになります。研修期間も長く、要望すればたいていのことはやらせてもらえるので、せっかくの機会をフル活用すべきです。なお、ICLEIのプログラムと自治体との関係がわかりにくいので、行った人に聞いて誤解のないようにしてから望んだほうがよいでしょう。

オフィスには日本人はゼロ。服装に関しては、どのような格好でも問題はありませんが、市や県の役場を訪問、滞在する場合は、シャツとスラックス等がベターだと思います。よほど特別な公式行事がない限りネクタイ、スーツは必要ありません。

渡邊　耕二　　KOJI WATANABE

派遣先	Examination Council of Zambia（ザンビア）
研修期間	2009年8月2日　～　2009年9月28日
研修内容	学習達成度調査であるNational Assessment Survey 2009のデータ処理および解析

Impression of Internship

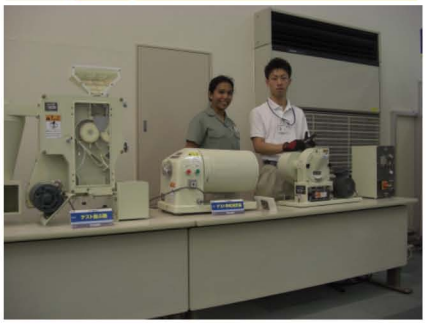
表面的なものかもしれませんが、この調査に参加させていただいたことで、ザンビアの学校の雰囲気や生徒と教師の関係などを体感できたことは、大きな財産です。生徒の解答の様子に目を向けると、数学や英語を苦手とする生徒が、他の教科と比較すると多いといった印象を受けました。特に英語に関しては、NASの正答率からも数学、理科と比べると困難度が高いと予測できます。ザンビアでは一般に言われることに、生活における言葉と学校で使われる言葉の違いということが挙げられます。実際に学校を訪れることでこの課題についても実感できました。これは学習成果に高いレベルを求めるならば、解決しなければならない課題の一つでしょう。ザンビア社会における学校の価値が、日本社会におけるそれとは大きく違うのかもしれません。取り組む課題の裏側にある何かを調べることも、大切な課題であると思います。

また子どもたちについての第一印象は、とても教師に従順であり、規律をしっかり守っているいう印象です。例えば教師が教室に入ると全員が起立をし、挨拶をします。テスト問題を配るときには、手渡しをしようとしますが受け取りません。同僚の配り方をみると、手渡しではなく、投げ渡すといった感じでした。子どもたちは緊張していたのかどうかわかりませんが、表情が硬く私のイメージしていた学校の雰囲気とは大きく違っていました。以前算数・数学教育プロジェクトに関わったエクアドルの場合では、私のような外国人が教室に入ったら拍手をされるような雰囲気もあり、決して規律をしっかり守るというようなことはありませんでした。あくまでも私の経験ですが、生徒と教師の距離感などに違いを感じました。しかし、テストや勉強に向かう姿勢は大差がないように思えました。また子どもたちはとても素直で、教室の外にでると可愛い笑顔をむけてくれました。

2009年度夏期派遣学生　国内インターンシップレポート

JOSHI NIRAJ PRAKSH　ネパール出身
PIYA LUNI　ネパール出身

Host institute	SATAKE CORPORATION
Period of internship	2009年8月17日　～　28日 2009年8月31日　～　9月11日
Contents of work	Assistance of examination and analysis on rice milling



Impression of Internship

The things I have learned from this internship can be summarized briefly under the following headings:

1,Latest technologies in rice processing / SATAKE is specialized in manufacturing machineries for post-harvest processing of rice, wheat, and corn. During this internship, I was able to learn about the latest technologies related to rice processing. I found that compared to my country Nepal, processing technology is far more developed here in Japan. SATAKE has developed a range of machineries for harvesting, dehusking, debranning, polishing, germ removal, and packaging of rice. I was able to use few of the simple machines like the polishing machine during my internship. SATAKE has not only developed machines suitable for large scale, but also machine called “magic mill”, which is very small, portable, and can be used in kitchen as and when necessary. But many of these machineries cannot be directly used in my country because the rice variety that is grown in Japan is short grain, while rice in my country is usually medium to long grain. So the machineries need to be adjusted for medium/long grain rice before it is sold/used in the Nepal.

2,Latest technologies in food sector / SATAKE works not only in the field of machineries, but also in the field of food technology. SATAKE produces fast foods like magic rice, magic pasta, and rice of Ochazuke series, which are very convenient while traveling. SATAKE is also conducting various researches to produce rinse free rice.

3,Work ethics in Japanese offices / Another important learning from this internship is the work ethics of Japanese offices. I found that the Japanese are very strict to time – something which Nepalese should learn. Similarly, I also found that the staffs there had very strong self-motivation to complete their responsibilities. Very often they worked round the clock with much dedication. I will try my best to apply the same motivation and dedication in my future works as well.

4,Limitations / The major limitation of my internship was the language difference – I knew very little Japanese while my internship supervisor knew very little English. As a result, both of us had to try very hard to communicate. There were many researches and the working methods of machines which I could not understand fully due to the language barrier. However, both of us tried our best to use electronic dictionaries and the internet language tools to make each other understand what we were trying to say. By the end of my internship, I learnt many technical Japanese words, and also slightly improved my Japanese skills.

5,Summing up / Internship at SATAKE is a good opportunity to get a completely new experience, especially for a foreign student like me. The time management, motivation and dedication of the staffs will be a very good learning for me if I can apply these for my future career as well.

Advice to next internship student

Internship at SATAKE corporation was a good opportunity to get a completely new experience on working environment of Japanese firm as well as research and development (R&D) activities they are involved in. The time management, self-motivation and dedication of the staffs to their work will be a very good learning for the students from developing countries. However, language difference is major barrier for communicating with internship supervisors. Though internship supervisors try their best to translate the things in English using yahoo or google translator, internees should also be well prepared to communicate the things in Japanese at his/her best.

OB/OG報告

金本和也 （広島大学大学院国際協力研究科2010年3月卒業予定）
独立行政法人　環境再生保全機構就職予定

「予想以上に厳しかった」就職活動を終えた今の正直な感想です。国際協力の仕事につきたい（それもできれば環境問題に関わることができる）と考えていた私は、国際協力機構（JICA）をはじめいくつかの国際協力機関を受けましたが、結果はことごとくダメでした。気持ちも落ち込む中、それでも腐らず就職活動を続けられたのは周りの方々の配慮に加え、「自分がやりたいことに正直でいたい」という気持ちがあったからだと思います。海外インターンシップはこの気持ちを強くした貴重な経験でした。結果として就職活動も終盤に差し迫った9月上旬、国際環境協力を業務の一つとしている環境再生保全機構から内定をいただくことができました。

私は2008年8月から約5週間の日程で、（株）アルメックのベトナムハノイ事務所でインターンという形でお世話になりました。現地の学生の通学行動に関して調査を行う一方で、重要な会議に参加する機会やJICA職員の方から国際協力に関して話を伺う機会をもつことができました。それらは国際協力に関わったことのなかった私にはとても貴重な体験であり、「国際協力の分野で貢献したい」という思いがより強くなりました。帰国後は「もっと国際協力のことについて知りたい」という思いで、国際協力のキャリアフェアや、国連機関の主催するスタディキャンプに参加したりしました。その過程で知り合った人のアドバイスがきっかけで、面接に落ちていた原因に気づくこともできました。

このように海外インターンシップを機に積極的にアクションを起こすようになり、私にとって就職活動を支える大きなきっかけとなりました。国際協力の分野に限らず、自分の将来を考える上できっと貴重なステップになることと思います。

JEON Hyeonjeong（広島大学大学院国際協力研究科2009年3月卒業）
所属：特定非営利活動法人「ピースビルダーズ」

タンザニア出張

グローバルに活躍できる広島っ子事業

“In our organization, each staff is supposed to have their own project, so called ‘MY PROJECT’. What kind of project do you want to develop?”
“Well… I would like to consider a project related to shear butter industry in Ghana and the women producers & their communities.”

この会話は、私と「NPO法人ピースビルダーズ 」の入社面接の時のことです。私は2008年の9月から6週間、IDECのECBOプログラムを通じて、JICAインターンとしてガーナに滞在していました。その時、ガーナのシアバター産業とそれに関わっている女性グループやコミュニティー開発の調査を行いました。その後「シアバター」は私の中で大きなキーワードとなっており、現職においても、シアバターに関する「マイ・プロジェクト」を立ち上げる計画を考えています。

私が今年の6月から働いている「NPO法人ピースビルダーズ」というところは、国際協力、中でも平和構築活動を行っている日本の団体です。特に私が関わっている業務は、平和構築のための人材育成・教育、フェアトレード（カフェを運営しています！）、紛争後地域支援、広島教育委員会からの委託事業、翻訳（英語・日本語）です。日々の業務は日本語と英語で、どっちの言語も母国語ではないところは大変ですが、それがまたお楽しみでもあり、やりがいもあります。また、営利を目的とするようなところではないため、自分の興味のあるところに積極的に関わり、責任を持って企画し、実現することもできます。

韓国からの留学生として日本のIDECで学び、ECBOを通じてガーナのことを考えさせられ、また世界へとそのステップを踏み出すことは、誰にでも訪れるような機会ではありません。このような幸運があったからこそ、今の私が毎日楽しく働くことができたでしょう。今後も、平和構築活動に関わり、世界の人々をつなぎ、お互いの苦しみを分かち合い、「平和をつくる」ために役立ちたいと考えています。単に夢を語るだけではなく、現実感覚と現場感覚を身につけ、実践を重ねていきたいと考えています。

フェアトレードカフェ・パコ

世界の人々に貢献することが、自分をさらに豊かな人間にしてくれます。私が世界から学んだこの特別な教訓を、忘れることなく大切に守っていきたいと強く思うこの頃です。（原文：日本語）

2007-2008TAの谷口万里子さんより

外務省・草の根無償資金協力事業（ナイジェリア）に参加中

私は、i-ECBOプログラムを通して、バングラデシュに2007年と2008年にそれぞれ約1ヶ月間滞在し、農村電化事業の研究を行いました。バングラデシュでの体験は、自分が将来国際協力にどのように関わっていくかを真剣に考える機会となり、開発の分野で一度実務経験を積んでみたいと思うようになりました。

そして現在、日本政府が各在外公館を通して実施している「草の根・人間の安全保障無償資金協力（草の根無償）」に係る外部委嘱員として西アフリカの国・ナイジェリアで生活をしています。草の根無償とは、一般無償資金協力と比べて比較的小規模な、現地・国際NGO、地方自治体等が行う草の根レベルのプロジェクトを支援するものです。在ナイジェリア日本大使館では、「初等教育」及び「給水・衛生」を草の根無償における重点分野とし、NGO及び地方自治体から寄せられる年間約200件の支援要請から10件強の案件が毎年選定されています。私はここで外部委嘱員として、①案件形成（NGO等から要請書受付、事前調査等）、②案件実施状況のモニタリング、フォローアップ、③報告書等文書の取り付け、④贈与契約の署名式等のアレンジといった草の根無償に係る業務を行っています。ナイジェリアに来て9ヶ月が過ぎ、大体ですが草の根無償の一連の仕事を経験することができました。

NGO等現場で活動する人たちは現状を変えよう、未来を良くしようという熱い志を持って仕事に取り組んでおり、彼らと仕事をする中で、私自身勉強になることが多々あります。ただ、ナイジェリアでの生活も1年目の終わりにさしかかり、仕事も大分慣れてきて、かつ普段は現場と離れたオフィス内での業務で書類作業に忙殺され、裨益者である現地の人びとのことを時々忘れてしまいそうになる自分がいるのですが、初心を忘れず、常に現地の人びとのことを念頭において学びの姿勢で仕事に取り組んでいきたいと思います。

総括報告会開催

2009年2月16日（火）
学士会館2階

現役学生の発表、
パネルディスカッション
−プログラムの成果と今後−

事務局編集後記

夏期インターン生のほぼ全員が帰国し、冬期インターン生の事前研修が始まりました。熱の入った報告会の他に、今回はケース作成という課題がありますので、経験をケースという形にするために、またまた熱が入っているようです。今までの募集状況を振り返ると、派遣学生は夏期は日本人、冬期は留学生が多い傾向にあります。冬期派遣の留学生たちも、自分たちの国でもなく日本でもない第三国を目指して、事前研修に励んでいるところです。（G.ecbo事務局K）

活動予定 2009年度12月-3月

リスク管理セミナー（12月）

英語プレゼン最終発表（1月）

ケース提出締切り（1月）

海外インターンシップ壮行会（1月）

インターンシップ派遣（2、3月）

派遣先教員訪問

総括報告会（2月）

次号予告

＊2009年度冬期派遣学生の報告
＊総括報告会報告
＊ECBO修了生からの声
＊派遣先企業からの声　他

Global Explorers to Cross Borders G.ecbo

広島大学大学院国際協力研究科G.ecbo事務局
〒739-8529
広島県東広島市鏡山1-5-1

電話 082（424）6950
Email: iecbo@hiroshima-u.ac.jp

ホームページもご覧下さい。
http://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo/index.html